

令和7年度奈良県食と農の振興会議畜産振興部会 議事録

(1) 開催日時

令和7年9月22日(月)

(2) 開催方法

対面開催

(3) 議題

第1議題 奈良県酪農・肉用牛生産近代化計画について

第2議題 奈良県畜産技術センター研究開発中期運営方針の策定について

(4) 参加委員(五十音順)

第1議題

(公財)奈良県食肉公社 常務理事

石原 昌伸

京都大学大学院農学研究科 准教授

熊谷 元

植村牧場(株) 代表取締役

黒瀬 礼子

奈良県畜産農業協同組合 代表理事組合長

竹田 芳弘

兼 (一社)奈良県畜産会 代表理事会長

消費生活アドバイザー

田中由香利

(公社)奈良県栄養士会 会長

松田 仁

第2議題

第1議題の参加者6名

(株)微生物化学研究所 シニアテクニカルアドバイザー

岡 章生

近畿大学農学部 教授

加藤 容子

(5) 説明

事務局より、奈良県酪農・肉用牛生産近代化計画及び奈良県畜産技術センター研究開発中期運営方針について説明

(6) 審議

●第1議題 奈良県酪農・肉用牛生産近代化計画について

➤ 質疑応答・意見等

【松田委員】

- ・ 計画中、「ICT 機器やスマート農業技術の活用」と説明があったが、経費が掛かる部分について、補助はあるのか。

→（回答）

- ・ 機械設備投資等については、クラスター事業等として国から補助金が出る。県としても奈良県畜産会とともに申請事務等の支援を行っている。

【松田委員】

- ・ 担い手の育成という意味で子供にも牛舎等を見てもらうことを提案する。

【竹田委員】

- ・ スマート農業技術の導入にはかなりの投資が必要。国の補助は最終的には1/4ほど。メンテナンス費用も掛かるため、経済的に厳しく、導入にはスケールメリットが必要。一方、搾乳ロボットの導入後、牛にストレスが掛からないので乳量が10-15%伸びた。
- ・ 哺乳ロボットは、子牛が自由に摂食できるため、効果が大きい。

【田中委員】

- ・ 奈良県内における ICT 機器の導入状況はどうか。

→（回答）

- ・ 計画作成に当たり全農家を対象に実施した調査によると、県内農家の18%がICT機器を導入。

【石原委員】

- ・ 現状、奈良県のと畜場は輸出対応となっていないが、県としては輸出の方向を向いているか。
- ・ 肉用牛全体の生産頭数は増頭する計画になっているが、大和牛は生産目標頭数の記載が無い。また、プライベートブランドについても触れているが、大和牛にこだわらない方針ということか。
- ・ 前回の計画では大和牛の生産目標1,000頭という記載があったが、みつえ高原牧場の畜産団地の計画を前提としていたのか。

→（回答）

- ・ 食肉センターの開設から35年が経過するなか、施設の老朽化への対応と併せて、あるべき機能の検討を行っていく。他県で輸出対応施設が増えていることもあり、輸出対応は検討する機能の一つであるが、そうするかどうかは、検討の結果による。
- ・ 生産目標頭数は国の指針及び農家調査結果に基づいている。県全体の計画であることから、大和牛もプライベートブランドも広く生産拡大するという記載にした。
- ・ 前回の計画では、みつえ高原牧場の畜産団地の計画があったので大和牛の生産目標を1,000頭とした。今回は、生産者の増頭意欲を踏まえた計画としている。

【黒瀬委員】

- ・ 小規模農家に適用されるような補助金制度がないと感じている。
- ・ エコフィードの給与に関しても検討してほしい。
- ・ 堆肥の処理に困っている。

→（回答）

- ・ 補助金制度については、情報を把握し次第、共有させていただく。
- ・ 堆肥処理、未利用資源の活用も大切な課題と捉えている。畜産技術センターでも研究テーマとして取り組む予定。

【竹田委員】

- ・ 弊社も堆肥処理に苦戦している。
- ・ 補助金に関しては、県の単独予算でも取り組んで欲しいと思うものの、困難であることは十分理解している。
- ・ 自給飼料に関する取組は、近郊では困難。輸入の餌をベースに考えるならエコフィードの活用に取り組むべきだが、奈良県だけでは難しい。近畿地域として取り組まないといけない課題と考える。

【熊谷委員】

- ・ 現在、乳牛飼養頭数の内訳は、総頭数 2,841 頭、経産牛頭数 2,526 頭となっている。県外からかなりの頭数を導入しているのか。
- ・ 肉専用種飼養頭数の内訳は、繁殖牛が 543 頭、肥育牛が 2,302 頭となっている。どの県から導入することが多いのか。外部導入でも大和牛の要件を満たすのか。

→（回答）

- ・ 搾乳牛の自家育成は少ないと思われる。県畜産農協の育成牧場でも預託は減少している。
- ・ 肉用子牛は宮城県から導入されていることが多い。他には和歌山県、九州等の市場から導入されている。雌に関しては最長飼養地が奈良であれば、大和牛の要件を満たす。

【盛口委員（市民生活協同組合ならコープ 専務理事）】※事前提出の意見を熊谷委員代読

- ・ 奈良県の畜産・酪農は、生産者の高齢化や後継者不足により廃業が増加しているうえ、地形的制約も大きい。ICT や預託牧場による労働力不足対策に加え、新規参入者支援や廃業予定者とのマッチングが必要である。
- ・ 県産和牛のブランド力強化と差別化、酷暑対策（家畜舎の温度抑制、新品種開発、アニマルウェルフェアの観点を含む）が喫緊の課題である。

- ・ 家畜伝染病リスクの高まり、酷暑、飼料・施設コスト増などで生産者の不安が大き
く、持続可能な畜産の将来像を明確に示すことが重要である。

●第2議題 奈良県畜産技術センター研究開発中期運営方針の策定について

➤ 質疑応答・意見等

【岡委員】

- ・ 研究課題「効率的な優良子牛の生産技術の開発」に、発情同期化技術の実証が挙がっ
ているが、すでに研究が進んでいる中で研究の余地はあるのか。
- ・ 受精卵生産体制整備に関しては、限られた資源を活用することになるため、ロスを出
さない、病気の牛を出さないという観点も必要になる。方針に入れて欲しい。

→（回答）

- ・ 発情同期化技術は色々なプログラムあり、飼養管理や飼育環境等を考慮して検証した
いと考えている。また受精卵生産に関しては、畜産農家に配布、利用してもらう体制
を整備したい。併せて、OPUについて、着手を検討している。

【加藤委員】

- ・ 研究課題において豚の記載がないが、豚についてはどう考えているか。豚の遺伝子マ
ーカーについては、新規に見つけるのか。
- ・ 研究の優先順位はどうか。

→（回答）

- ・ 豚は、一部の養豚農家から抗病性の遺伝子マーカーの活用について研究に取り組んで
欲しいとの声がある。まずは、畜産技術センターの豚を調査することから始めたい。
また、未利用資源の活用等も入ってくる可能性がある。
- ・ 各研究課題において優先順位はつけていないが、短期的には強弱が付く可能性はあ
る。

【熊谷委員】

- ・ 「耕畜連携モデルの推進」における奈良県版とは、どのようなものか。具体的な進め
方を教えて欲しい。

→（回答）

- ・ 淡路島の先行事例を参考にしている。耕種農家が栽培した飼料用イネを畜産農家が機
械で収穫するということを検討している。県内では田んぼが多く、畑地化はハードル
が高いので田んぼのまま活用して飼料用稲を栽培することを想定している。